

研究テーマ	<p>[Ⅲ 造形感覚を発揮して、自分らしい表現を生み出すこと]</p> <p>機能性と美の調和を表現するための手立ての工夫 —— 中学2年生「箸づくり」の実践を通して ——</p>
-------	---

神栖市立波崎第一中学校 教諭 庄司 友紀

1 研究テーマについて

生徒の様子を観察したり、発言をよく聞いたりしていると、表現にしろ鑑賞にしろ、鋭い造形感覚をもっているように感じられる。しかし、生徒の多くは造形感覚を発揮させる前に、自分には作れないとあきらめてしまう傾向にある。自分が作りたいものではなく、自分が作れるものに取り組んでいる。制作に対して恐れる気持ちやめんどくさいと感じる気持ちがあるようだ。今回の研究テーマである「Ⅲ 造形感覚を発揮して、自分らしい表現を生み出すこと」では、生徒のこうした気持ちを和らげるにはどうしたら良いかが課題となった。生徒に意欲をもたせ、さらにそれが継続するような実践をしたいと考えた。

生徒の造形感覚を引き出すための課題設定が必要だと考えた。そのためにはまず、生徒はどのような場面で造形感覚が引き出されるのかを知らなければならない。粘土を用いた立体造形においては、題材により生徒の反応は様々であるが、特に反応の良かったものの一つに、「本物そっくりに作る」という課題があった。写真や実物を見せ、そっくりの形や色を再現する課題には、熱心に取り組む生徒が非常に多かった。本物に似せるために、様々な道具を駆使したり、色やニスの塗り方にも工夫が見られた。それはモチーフが自然物でも人工物でも同じであった。ここから考えられるのは、生徒には作品完成のイメージが明確にあり、作品の制作過程の中で、よりイメージに合った表現を試行錯誤していたのだろう。つまり、生徒の造形感覚を引き出すには、生徒自身が作るもののイメージを明確にもつことが大切なのではないだろうか。

自分らしい表現を生み出すには、中学校学習指導要領解説「A表現」（2）ウにもあるように、美しさに視点を置いた造形感覚を発揮しながら、材料や用具の生かし方を含め、目的や機能などをより総合的にとらえて表現の構想を練る学習過程が重要である。したがって今回の実践では、「美術的な視点でとらえる」「用具の扱いを知る」「機能性を考える」という3項目が学習過程に組み込まなければならないと考えた。

○テーマに迫るための手立て

（1）身近なものを美術的視点から見つめ直す

普段何気なく目にしている家財道具や食器などを、美術的視点で観察し、評価することから始めた。身近にあるものへ、興味をもつことが制作意欲をかき立てると考えた。また、これから自分が制作するものが、実用的であることに加えて、美との調和で成り立つことをイメージさせたいと考えた。

（2）使用する道具を知る

箸の制作には、小刀を使用する予定だった。しかし、これまでに小刀を使用した経験のある生徒は一人もおらず、初めての体験になった。小刀は使い慣れるまでに、少し時間がかかる。いきなり箸制作に入ってしまうと、失敗につながってしまう。そこで、箸制作に入る前に、「木の枝鉛筆」を使って削る練習をした。

（3）ワークシートや資料の工夫

今回の実践で使用したワークシートは、主に自己評価に関するものだ。記述が容易にできて、授業の成果を振り返りやすいものにしたと考えた。また、制作の流れと目当てを明記し、生徒が授業全体に見通しをもち、目標が明確になるように工夫して作成した。授業の中で使用した箸制作の資料は、農文協「つくってあそぼう」シリーズ「箸の絵本」を参照した。小学生対象の絵本であるが、箸の歴史や種類、制作手順などが易しく説明されており、中学生でも十分に対応できるものだった。

（4）機能性の確認

小豆を作業台にいつも置いておくことで、機能性を確認しながら制作させた。見た目の良さと、使いやすさの調和を意識しながら、生徒は制作を進めることができた。また、普段使っている箸と、自分が制作している箸との相違点を確認し、完成のイメージを細かく、明確にもたせることができた。

2 実践例

(1) 題材 手づくりの楽しみ～箸づくり～

(2) 目標

- ・ 完成後、実際に使用することを目的として、意欲的に制作しようとする。
(関心・意欲・態度)
- ・ 機能性と美の調和を意識し、自分らしいデザインをすることができる。
(発想・構想の能力)
- ・ 小刀を安全に使用し、自分のもっているイメージを発展的に表現できる。
(創造的な技能)
- ・ 完成した作品をもとに感想を述べ合い、友人相互の心の交流を図ることができる。
(鑑賞の能力)

(3) 題材について

生徒に制作するもののイメージを明確にもたせるために、生徒の身近でよく使用するものを題材に取り上げたいと考え、ほとんどの生徒が毎日使用する箸を作ることにした。箸は慣れ親しんでいるため、完成図がイメージしやすい。制作中は生徒自身が作業の進み具合を確認したり、次の作業工程への見通しをもったり、完成までの課題解決を検討したりすることが容易であると考えた。また、完成後に使用する目的で制作することで、目標が明らかになり、生徒の制作意欲がかき立てられる。

作品の構想段階に入る前に重点を置き、より発想・構想の幅を広げたいと考えた。そのため、身の回りにあるものを美術的視点で捉えること、用具の扱いを知ることを前段階として、本制作である箸づくりを行った。

(4) 学習計画 (全 13 時間)

時間	学習活動	評価の観点			
		関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
2	家財道具や食器などを美術的視点から観察、評価したことをまとめる。	身の回りにあるものを見つめ直し、美術的視点で捉えようとする。 (観察, ワークシート)	鑑賞した内容を、わかりやすくまとめることができる。 (模造紙)		身の回りにあるものから、機能性と美を感じ取ることができる。 (模造紙, ワークシート)
3	小刀を使用し、木の枝鉛筆の芯を削り出し、周りに装飾を施す。	小刀の正しい使い方を理解し、積極的に新しい方法を探り、挑戦する。 (観察, ワークシート)		小刀を正しく安全に使用し、木を削る技能を身に付けることができる。 (観察, 作品)	
7 本時はその3	箸をデザインし、小刀を使用して制作する。	完成後、実際に使用することを目的として、意欲的に制作しようとする。 (観察, ワークシート)	機能性と美の調和を意識し、自分らしいデザインをすることができる。 (ワークシート, 作品)	小刀を安全に使用し、自分のもっているイメージを発展的に表現できる。 (作品)	
1	生徒相互で制作した箸についての鑑賞会、批評会を行う。	友達の作品を積極的に鑑賞し、良い点や工夫した点を見つけようとする。 (観察, ワークシート)			完成した作品をもとに感想を述べ合い、友人相互の心の交流を図ることができる。 (ワークシート)

(5) 本時の学習(8時間目)

- ①目標 ・より箸先の機能性を高めるために、意欲的に制作に取り組もうとする。
 ・小刀の使い方を工夫し、自分らしい表現をすることができる。
- ②準備・資料 小刀、木材、小豆、資料、自己評価カード、参考作品
- ③展開

学習活動・内容	支援の手だて(○)・個への手だて(下位の生徒●, 上位の生徒◎)及び評価(*)
<p>1 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">箸先の機能性を確認しながら、制作しよう</div> <p>2 教師の説明を聞きながら、箸の機能性の確認を行う。</p> <p>(1) 小豆を皿から別の皿に移す。</p> <p>(2) 箸を持った心地、作用点の位置を確認する。</p> <p>3 見つけた課題をもとに、制作を行う。</p> <p>(1) 小刀を使い、削る。</p> <p>(2) 機能性を確認しながら作業する。</p> <p>(3) 片付け、用具の手入れを行う。</p> <p>4 本時のまとめをする。</p> <p>(1) 本時を振り返り、反省を自己評価カードに記入する。</p> <p>(2) 教師の話聞き、次時の活動を確認する。</p>	<p>○前時までの学習を振り返らせ、本時に学習することを説明する。</p> <p>○機能性について、確認するポイントを示す。</p> <p>○ものが上手くはさめるか、箸先がぴったり重なるかを確認させる。</p> <p>●言葉では伝わりにくい生徒には、図を描いて説明し、理解を深めさせる。</p> <p>◎小刀の扱いに慣れている上位の生徒には、箸先の様々なデザインの資料を示し、意欲を喚起する。</p> <p>○箸先は、細かい作業が必要であるため、持ち手と逆の親指をそえるように注意をうながす。</p> <p>●小刀を上手く扱えない生徒には、近くで実演して見せたり、指導したりする。</p> <p>○作業中も度々機能性を確認するように指示を出す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">*より箸先の機能性を高めるために、意欲的に制作に取り組もうとしたか</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">*小刀の使い方を工夫し、自分らしい表現をすることができたか</div> <p>○手入れをしっかりとしないと、小刀が錆びてしまうことを注意する。</p> <p>○本時に学習したことをもう一度説明し、振り返らせる。</p> <p>○自己評価カードを配布し、本時の学習で分かったこと、工夫したこと、疑問に思ったことなどを記入するように促す。</p> <p>○本時の学習から出てきた課題について話をする。次時の活動について説明をする。</p>

3 研究のまとめ

(1) 授業の様子

導入では、家財道具や食器などを美術的視点から観察，評価したことをまとめた。普段何気なく接している家財道具や食器を美術的な視点で観察することにより，そのものものつデザイン性や機能性について考えさせる機会になった。



次に，小刀を扱った経験がある生徒は，全体の1割に満たなかったので，小刀の使い方について説明を行い，箸を制作する前に練習として，鉛筆の芯を削り，装飾を行った。削り始めは小刀をうまく扱えずに苦戦する生徒が多かったが，装飾をし終える頃にはほとんどの生徒が使い方のコツをつかむことができた。



箸頭のデザイン，箸先の形を考えさせた。鉛筆を小刀で削った経験から，小刀でどの程度のデザインが細工可能かを考慮している生徒が多かった。箸先は用途を考え，太さや形を資料を参考にデザインした。

箸を削り始めてからは，小豆を準備し，機能性の確認が行えるようにした。箸先の削り具合や箸の握り具合，使いやすさなどを細かくチェックし，修正を加えながら制作することができた。中には友人同士で箸を交換し，使った感想や意見を述べ合う姿も見られた。デザイン性だけでなく，機能性に関する目標を明確にすることができた。



(2) 使用した資料・ワークシートの例



農文協「つくってあそぼう」シリーズ「箸の絵本」より



学習内容	目標	観察ポイント	評価
1. 箸の材料の選び方	適切な材料を選べる	色、匂い、質感	
2. 箸の削り方	安全に削れる	削り方、削り角	
3. 箸の仕上げ	滑らかに仕上げられる	仕上げ方、仕上げ材	
4. 箸の完成	美しい箸が完成する	完成品の見た目、質感	

図や写真が多い資料を多く使用するように心がけた。視覚にうったえるものを多く用いたことで、より理解が深まった。

自己評価カードは、記述が容易にでき、授業の成果を振り返りやすいものにした。毎時間の課題を明確につかむことができ、制作全体の見通しをもつことにもつながった。

(3) 完成作品





箸頭拡大



箸先拡大



(4) 成果と課題

今回の実践において、機能性と美の調和を表現するための取り組みとして、「美術的な視点でとらえる」「用具の扱いを知る」「機能性を考える」という手立てを考え、さらに理解を深めるためにワークシートや資料の工夫を行った。成果としては、生徒自身が作るもののイメージを明確にもつことができ、主体的に制作に取り組むことができた。授業後の自己評価カードを見ても、自分の課題が明確にもてたことで、次時の目標をしっかりと立てられることができた。作品の制作過程の中で、試行錯誤しながらより用途やイメージに合った表現へと近づけようとする姿が見られたので、機能性と美を総合的に捉えることができたのではないかと感じた。

この実践における課題は、材料の選定についても考慮すべきであったと考える。今回箸の材料には栃を使用した。軟らかくほとんど力を入れなくても削れてしまう材料であるため、力加減を間違えると折れてしまうことがあった。特に小刀の扱いが上手にできない生徒は、削りすぎてしまい失敗することが多々あった。次に、使用者を本人に限定してしまったことだ。「自分専用」ということで意欲を見せる生徒がいる一方で、そこに甘えを見せる生徒もいた。また、今回の実践では使用者や他者の視点に立ち、機能性や造形的な美を捉えるという点においてはかなり不十分であった。多様な使用者の気持ちを想像することにより、さらに生徒自身のイメージは膨らむと考えられるし、新しい表現を生み出すきっかけになるかもしれない。“造形感覚を發揮して、自分らしい表現を生み出す”ために、題材だけでなく条件の設定にも工夫が必要であると考えた。

今回の実践では工芸を取り扱ったが、特に箸という生徒自身の身近にあり、完成までのイメージがもちやすい題材であった。そのため、制作過程における課題が見つけられやすく、目標も立てやすかったと考えられる。これから様々な題材に接していく中で、どの題材においても生徒が造形感覚を發揮するために、課題に対する目標を明確につかませる手立てを考えていく必要があると感じた。着地点が明確であれば、生徒は主体的に活動に励むことができる。こうした活動の中で自分らしい表現に挑戦しようとする姿勢が育まれる。今回の研究の中で学んだことを他の題材にも生かしたい。また、三年間のカリキュラムの中で、段階的に指導することでより成果が上がると考えられる。今一度、年間計画からしっかりと見直し、今後に生かしていきたい。